王勃の春――「春思賦」を手がかりとして――

有馬　みち

一　はじめに

初唐四傑の一人である王勃は、春の山水の詩、上巳節を祝う詩、春の行旅の詩など、春を題材とした作品を多数残している。それらの作品は、彩り豊かな花樹の中での散策による満たされた思い、優雅な宴席での興趣など春の喜びの思いを詠うものばかりではなく、不本意な旅による満たされない思いを詠うものも見られる。詠われる季節は春であっても、そこに描かれる心情はそれぞれ異なるものである。さらに王勃の春の作品には、初唐期にあって珍しく長編の賦「春思賦」があり、その題の通り春の思いを描いたものである。その「春思賦」の序文は、「猶不能忘情於春、知春之所及遠矣、春之所感深矣。」と、春が人に及ぼす影響は大きく春の与える感動は深いことを述べたものである。王勃にとって春は、それほどまでに心を動かされる季節なのである。季節に寄せて心情を詠うことは潘岳「秋興賦」、謝恵連「秋懐」など以前から見られる表現であるが、この「春思賦」の序文と数多くの春を題材とした作品から、王勃が春に寄せる思いはなみなみならないものであると言える。そのため、王勃の春の作品を見ることは王勃の理解を深めることにつながると考え、本論では王勃の長編の賦「春思賦」を取り上げて王勃の春について考えていくこととする。また王勃は、旅路の不遇を描くことがよく見え、特に蜀の旅は、「澗底寒松賦」に「歳八月壬子、旅遊於蜀。…（中略）…徒志遠而心屈。

遂才高而位下。」や、「蜀中九日」に「人情已厭南中苦、鴻雁何来従北地。」と強い不満の感情を描いている。「春思賦」も「旅寓巴蜀、浮遊歳序。殷憂明時、坎壈聖代。」と、やはり蜀で作られており、行旅の作品と関わりが深いと考えられる。「春思賦」は春を題材としているため、行旅詩の中でも春の行旅詩と関わりが深いと考え、そこでまず春の行旅を題材とした作品を見ていき、その上で「春思賦」の春の描写を考えていく。

二　春の行旅詩

王勃の春の作品は、『爾雅』釈天「春為蒼天」注の「万物蒼蒼然生」の意そのままの、こんもりと茂って育つ草木を表わすような瑞々しい山水の美を愛でるものが見られる。山水での享楽を詠った「春園」、宴会の優雅さを詠った「上巳浮江宴韻得阯字」などは、春の花樹の萌芽を織り込まれており、春の光景を喜ぶ姿が窺える。だがその一方で、不本意な旅の思いを描いている作品が見えるのも一つの特徴である。王勃に限らず、そもそも行旅の作品は、別離や帰郷の念から悲哀の情を伴うものである。そして、旅の悲しみと春の美が対比されることで、より悲しみが際立つ効果がもたらされる。春と旅の対比は、王勃に先駆けて陸機の「悲哉行」に既に描かれている。

悲哉行

1　遊客芳春林、春芳傷客心。遊客　芳春の林、春芳客心を傷ましむ。
3　和風飛清響、鮮雲垂薄陰。和風清響に飛び、鮮雲薄陰に垂る。
5　蕙草饒淑気、時鳥多好音。蕙草淑気饒かなり、時鳥好音多し。
7　翩翩鳴鳩羽、喈喈倉庚音　翩翩たり鳴鳩の羽、喈喈たり倉庚の音。

9　幽蘭盈通谷、長莠被高岑。幽蘭通谷に盈ち、長莠高岑を被う。
11　女蘿亦有託、蔓葛亦有尋。女蘿亦た託するところ有り、蔓葛亦た尋ぬるところ有り。
13　傷哉客遊士、憂思一何深。傷むかな客遊の士、憂思一に何ぞ深し。
15　目感随気草、耳悲詠時禽。目は気に随うの草に感じ、耳は時を詠ずるの禽に悲し。
17　寤寐多遠念、緬然若飛沈。寤寐遠念多し、緬然として飛沈の若し。
19　願託帰風響、寄言遺所欽。願わくは帰風の響きに託して、言を寄せて欽ぶ所に遺さん。

（旅するものは春の林を芳しいものと感じるが、春が美しく芳しいとなおさら旅人の心を傷ませるのだ。穏やかな風は爽やかな音色でそよぎ、軽やかな雲は春霞を漂わせる。香草は芳しい香りが豊かで、時鳥は美しい音色で囀る。囀る鳩の翼は軽やかで、鶯の歌は美しい音色で響く。ひっそりとしたところを好む蘭は長い谷間一面に咲き、伸びやかに咲く花は高い山を覆う。女羅は身を寄せて生え、蔓葛もまた身を寄せて生える。ただ私だけが、身を寄せるところもない旅の身の上であることが嘆かわしい。憂いの思いはなんと深いことであるのか。春気に従って成長する草を見るにつけても心が動き、時節に沿って奏でる鳥の囀りを耳にするにつけても悲しい。寝てもさめても郷里を想う気持ちは強いが、遠く隔たってしまった。願うことはふるさとに向かって吹く風に託して、想いの言葉をあの人に送ることだ。）

陸機は、三句目から十二句目では華やかな春の光景を描き、つづけて十三句目から十八句目ではその華やかな光景とは対照的なの悲哀の情を描くことで、悲喜の差をくっきりと浮かび上げている。「和風」、「清響」、「淑気」、「好音」などの語から美しく穏やかな春の光景が窺え、春を愛でる気持ちが印象付けられる。そして、春が美しく華やかであればあるほど、それを素直に愛でることのできない旅人の辛さを際立たせている。さらに、『楽府解題』には、「悲哉行」を「陸

機云『遊客芳春林。』、謝恵連云『羈人感淑節。』皆言客遊感物憂思而作也。」（陸機の「旅人は芳しい春の林を旅する」や、謝恵連の「旅人は春の穏やかな季節に感慨深くなる」の表現のように、「悲哉行」と題するいずれの作品も旅人が愁いを節物から感じて作った）と評する。楽府「悲哉行」は、春の節物と旅の悲哀とを対比させることで、旅の辛苦を詠うものと言える。沈約の「悲哉行」にも「旅遊媚年春、年春媚遊人。」と、春と旅の描写が引き継がれていく（1）。王勃の春の行旅は、「悲哉行」と題される作品ではないが、春を素直に喜ぶことのできない旅人の愁いを描く点は同じである。しかし、楽府「悲哉行」では、誰かに思いを寄せることで愁いが少し和らぐが、一方王勃は、思いを誰かに伝えるでもなく、愁いを和らげるべく努力をするでもなく、ただただ悲しみに浸って詠い上げる点で楽府「悲哉行」とは異なる。

羈春

客心千里倦、春事一朝帰。　　客心　千里に倦み、春事　一朝にして帰る。
還傷北園裏、重見落花飛。　　還た北園の裏に傷み、重ねて落花の飛ぶを見る。

（故郷を長いこと離れているため、不安で心は疲れてしまっているが、長い間そのような思いをしている自分とは対照的にあっという間に春が巡り、異郷の地の北園でよりいっそう悲しい気持ちに浸っていると再び花の舞い散るのを見た。）

一句目の「客心」は旅に疲れた心のことであり、「千里」は時間的にも距離的にも長安から遠く離れていることである。二句目の「春事」は『管子』幼官篇「地気発、戒春事。」の例から、春に起きる現象全般を指すものと考えられる。また「帰」は、必ずしも春が過ぎ去る場合に限らず、四時が一巡して春が到来した場合に用いることもある。「春思賦」では、長安に訪れた春を「昭陽殿裏報春帰、未央台上看春暉。」と描いており、「羈春」での「帰」もまた、すぐさま春が去っ

ていくのではなく、速やかに春がやってきたことを表わしたものと考えられる。一・二句目は、「千里」のうんざりとする長い時間と「一朝」の短い時間とを対比させ、相反する語を組み合わせることでその差を際立たせている。このことによって、一方では旅の辛い時間をより長く感じさせ、他方ではあっという間に季節が一巡してしまったことをより早く感じさせており、時間の推移を印象付けている。さらに、三・四句目では、「傷」、「落花」から悲哀の表現が見て取れる。「羈春」は、長く苦しんでいる状況の中で春だけは速やかに経過していくことと、馴染むことのできない異郷の地で花が散るのことの両方の悲しみを描いた作品である。

このように、「羈春」での春の表現は、陸機に見られる「客遊感物憂思而作也。」と旅のせいで春の節物を素直に愛でられない気持ちの描写に加えて、過ぎ去った時間への痛みを合わせて描いたものと言える。同様作品に、「春游」があり、続けて見ていく。

春游

客念紛無極、春涙倍成行。　　客念　紛として極まりなく、春涙　ますます行を成す。
今朝花樹下、不覚恋年光。　　今朝　花樹の下、覚えず　年光を恋う。

（旅人として辛い気持ちが後から後から沸き起こりもう堪えることができず、春の涙は留まること無く流れ顔に次々と涙のすじを作っていき、今朝花咲きほこる木の下でふと郷里の春の光景を思い起こして過ぎ去った年月を痛感した。）

「春游」は、「羈春」と同じく旅路の悲哀を描いた作品である。旅への不安で流す「春涙」は、沈約の「詠桃」に「詎減当春涙、能断思人腸。」（どうして春の涙を減らすことができるであろうか、誠に私の心を散り散りにする。）と見える。

「詠桃」は桃花の盛りの季節にあって、桃の花に託して容色の衰えを危惧しながら孤独に思い人を待つ女の姿を詠んだ作品である。「詠桃」の「春涙」は、華やかな春に対して孤独な自分に流す涙と、閨情の作品にしばしば見られた美女の老いへの嘆きの涙と両方の意が含まれていると考えられる。王勃以降の「春涙」には、許渾の「下第別友人楊至之」に「花落水潺潺、十年離旧山。夜愁添白髪、春涙減朱顔。」（花落ち水はさらさらと流れ、十年郷里の山を離れる。夜の愁いは白髪を増し、春の涙は容色を衰えさせる）と見える。「下第別友人楊至之」は、長い時間をかけて科挙に挑んだにもかかわらず、落第してしまった思いを述べたものである。「下第別友人楊至之」の「春涙」は、無駄になってしまった十年を春に思い起こして流す涙と、その経過によって老いてしまったことへの嘆きの涙と考えられる。これらの「春涙」には、過ぎ去った時間に涙を流すイメージが伴われている。王勃の「春游」の「春涙」も同様に、旅の愁いによって春を素直に愛でられない気持ちに加えて、時間ばかりが虚しく過ぎてしまったことへの涙も含まれていると考えられる。四句目の「年光」は歳月と春の光景の両義（2）があるが、どちらにせよ故郷の光景に思いを馳せ、春の季節の中で過ぎ去った時間に悲しみを覚える姿が浮かび上がる。「春游」の「年光」、「春涙」は、ともに時間の経過が含まれており、「春游」も「羈春」同様過ぎ去った時間への痛みを描いた作品である。「羈春」、「春游」の春の悲しみは、長い旅で虚しく費やしてしまった時間を春が再び訪れたことによって痛感し、何も成し遂げないままに時間を送ってしまったことへの悲しみと言える。

陸機は、春の旅を華やかな描写と悲哀の描写とを対照的に描き、相反する感情を一つの作品内に収めることで、それぞれの感情を際立たせていた。だが逆に悲喜両方とも数句に亘って長く描写することで、本当に述べたい感情が漠然として定まらず、全体に拡散してしまったようにも見える。王勃の作品からも、陸機と同様に相反する語を対にすることで感情を際立たせているさまが窺える。だが、春の華やかさに対するものではなく、旅にうんざりしているがためにより長く感じる時間と、何も成し遂げられないままに再び春が到来し虚しく過ごしてしまった時間と、それぞれの時間の

感じ方の長短を対比させている。さらに、王勃はその対比を絶句の短い形式の中に端的に表現したことで、悲しみが集約されより際立っている（3）。また、悲しみの感情を他者と分かち合うのではなく、自己の内に留めてしまう点も異なっている。そして、行旅の詩に見られた、何も成し遂げられないままに時間だけが過ぎていってしまうことへの悲しみは、「春思賦」の序にも見える。時間の経過による春の訪れを悲しむことは、春に深い感慨を覚える王勃独特の表現の一つと言える。

三　春思賦の春

「春思賦」は、沛王府から排斥されて不本意な思いを抱いていており、ぼんやりと歳月が過ぎるままに蜀を旅していたときに作られた作品である。蜀への出奔以前は、若くして制挙の一つである幽素科に及第し、乾封年間（六六六―六六八）の初めに作った「上乾元殿頌」が沛王李賢の目に止まり、十代のうちから周囲に文才を認められていた。また李賢に侍読として仕えていた時は、進呈した「平台秘略論」が評価を受け、絹五十匹を下賜されるほどに重用されていた。このように沛王府での日々は自身の望んだ境遇に近いものであったと思われる。しかし、沛王府を追われて境遇は一転したため、蜀旅遊中に作られた「春思賦」では序文から不遇感を表わしている。

春思賦序

咸亨二年、余春秋二十有二、旅寓巴蜀、浮遊歳序。殷憂明時、坎壈聖代。九隴県令河東柳太易、英達君子也、僕従游焉。高談胸懐、頗洩憤懣。于時春也、風光依然。古人云、風景不殊、舉目有山河之異。不其悲乎、僕不才耿介之士也。窃禀宇宙独用之心、受天地不平之気。雖弱植一介、窮途千里。未嘗下情於公侯、屈色於流俗。凜然金石自

匹、猶不能忘情於春、則知春之所及遠矣、春之所感深矣。此僕所以撫窮賤而惜光陰、懐功名而悲歳月也。豈徒幽宮狹路、陌上桑間而已哉。屈平有言、目極千里傷春心。因作春思賦、庶幾乎以極春之所至、析心之去就云爾。

（咸亨二年、私の歳は二十二。巴蜀に旅し、ふわふわと漂って歳月を送っていく。私は平和な世にもかかわらず深く憂い、良く治まった知世にもかかわらず志を遂げられない。九隴の県令河東の柳太易は、英知にすぐれた君子であり、私は彼に付き従って遊んだ。高く胸中の思いを述べ、すこぶる憤懣を洩らす。今の季節はまさに春である。景観はもとのままでかわらないが、昔の人は「吹く風もさす光も以前と変わらないが、目を上げて見れば山河の佇まいがどこか違って映る。」述べたものである。どうして悲しくないであろうか、私は節操が固く自立した人としての才がないのである。私は世から孤独に行動する心地を授かり、天地から不満を思う気持ちを賜る。弱弱しく取るに足らず、行き詰まりに苦しむ境遇とはいえ、未だかつて諸侯に心を売ったことや、俗世間の悪いならわしに節を曲げたことはない。かっちりとした金石に自ら擬えても、なお春に感情を忘れることを春にできない。それほどまでに春の及ぶところは遠く、春の感ずるところは深いことを知るのである。春の与える影響が大きいために、私が貧乏に安んじて過ぎてしまった時間を愛しんだり、名を上げようと思って過ぎ去った年月を悲しんだりするのである。春に感慨深くなるのは、どうして一族の栄華を詠う「長安有狹斜行」や、春の桑摘みを詠う「陌上桑」の楽府だけであろうか。屈原の言に「千里遠く目の届く限りを見渡して春の心を傷ませる」とある。そこで春思の賦を作る。どうか春の至る所を極め、心の去就を細かく分けてはっきりさせたいものだ。）

「春思賦」の作られた「咸亨二年」（六七一年）は蜀の三年目にあたり、異郷で迎える二度目の春である（4）。前章で述べたように、滞在を望んでいないにもかかわらず、季節がまた巡って昨年と同じ地で再び春を迎えるさまが描かれている。自分の志を遂げることもできない上に、馴染むことのできない異郷の生活が二年にも渡り、過去の栄光にすが

る思いもあって、不満の気持ちが高まっていた時期でもある。この時間の経過が、同じ景色であっても異なるものに感じられるように、眼前に広がる光景により一層悲しみを感じているのである。さらに、『世説新語』言語篇の典故（5）と合わさって、悲しみをすぐさま理解してくれたのは王導ただ一人であったように、異郷での理解者も乏しかったのである。前章の行旅の詩でも、王勃は陸機と比べて、悲しみの感情を他者と分かち合うのではなく、自己の内に留めてしまうことを指摘したが心中を理解しあう相手は少ないのである（6）。

異郷での興趣を味わうことができるのは、自身と同様に郷里を離れて滞在するものだけである。そのような不遇感を抱えた異郷での生活の中、「益州夫子廟碑」（7）の制作を依頼した九隴県令柳太易は、心境を理解してくれる大切な存在であった。しかし、理解者との出会いを得ながらも、やはり異郷での生活では感情が穏やかにはならないし、職もない今の状況から後の人生をいかに生きればよいのか不安を抱えていたのである。そこで春に心を深く動かされる王勃は、春の光景をあまねく書き記すことで、その中からこれからの自分がどうありたいのかと願う自身の心を見極めるために、「春思賦」は作ったのである。

まず、王勃の「春思賦」の題となる「春思」の例は、曹植の「雑詩」に「春思安可忘、憂戚与我并。」と、南方へ出征中の夫を待つ女のことを詠った作品の中に見える。また、謝朓の「春思」詩では、「巣燕声上下。黄鳥弄儔匹。辺郊阻遊衍、故人盈契闊。」（燕の囀りがあちらこちらから聞こえ、鶯が仲良く戯れる。辺境の地では遠くに行くのもままならず、友を恋しく思う気持ちでいっぱいだ）と春爛漫の光景の中に久しく友と別れている悲しみが描かれる。だが、梁以降「春思」と題する作品は、閨情に多く見られるようになる。蕭子雲「春思」詩には「雪罷枝即青、冰開水便緑。復聞黄鳥声、全作相思曲。」（雪が解けて枝は青く色づき、氷が解けて水は緑に染まっていく。すると鶯の囀りが聞こえ、全てが恋の歌を歌ったものである）と想う人を恋い慕うさまが描かれている。また、沈約「春思」詩には「楊柳乱如糸、綺羅不自持。春草黄復緑、客心傷此時。青苔已結洧、碧水復盈淇。日華照趙瑟、風色動燕姫。襟前万行涙、故是一相思。」と遠く

離れる思い人の心変わりを不安に思うさまが描かれている。春の閨情を詠うものであっても、悲喜それぞれが詠われている。また、鮑照「和王丞」詩には、「秋心日迥絶、春思坐連綿。」と「秋心」と対になって春思を愁いの情として捉えるが、蕭子雲の「春思」例では春の喜びとして捉えている。つまり、「春思」は状況に応じて悲喜どちらにも用いられる語である。王勃の「春思賦」でも、どちらにも用いることが可能な語であるから、喜び、悲しみの一方に偏ることなく、さまざまな春を描くことにつながったと言える。

王勃の心情を表現する契機となるのは、「春思賦序」や、「春日孫学宅宴序」の「若夫懐放曠寥廓之心、非江山不能宣其気、負鬱怏不平之思、非琴酒不能洩其情。則林泉為進退之場、樽酒是言談之地。」（虚しくぽっかりとした穴を抱いた心は、自然の中で無ければ発散できない。鬱々と穏やかにならないを思い負った心は、音楽と酒でしか気が晴れない。）から、春の山水、琴酒である。もちろん、山水に向かって内省すること自体は目新しいことではないし、人が季節に心情を揺り動かされて作品を作り出すことも以前から見られる。『文心雕竜』の物色篇では、「春秋代序、陰陽慘舒、物色之動、心亦揺焉。蓋陽気萌而玄駒歩、陰律凝而丹鳥羞、微虫猶或入感、四時之動物深矣。」（春秋は絶えず移り変わり、陰の気に心を塞ぎ、陽の気に心を晴らす。自然も変化すれば、それに従って心もまた揺らぐのである。春の陽気が芽生えると蟻は活動をはじめ、秋の興趣が高まれば蛍も餌を集める。ちっぽけな虫ですら、四季の運行を敏感に感じるのだから、なおさら四季の運行が物事に与える影響は深いのである。）と書き出し、四季の運行が文学の表現に大きな影響を与えることを示している。その影響は、「春秋代序」と四季の中でもとりわけ春と秋が強く与えるようである（8）。『楚辞』九弁では「悲哉秋之為気也。蕭瑟兮草木揺落而変衰。憭慄兮若在遠行、登山臨水兮送将帰。」とあり、招魂では「朱明承夜兮時不見淹。皐蘭被径兮斯路漸。湛湛江水兮上有楓。目極千里兮傷春心。魂兮帰来哀江南。」とあるように、春と秋のそれぞれが「悲」、「傷」と感情を大きく揺るがすものとして描かれている。『楚辞』以降、秋に寄せて心情を述べた作品には潘岳の「秋興賦」や謝恵連「秋懐」があり、秋に悲哀の情を詠う作品はその後も引き継がれていく。一方、春

においても阮籍「詠懐」の中の一首に『楚辞』招魂の影響を受けたものが見られる。『楚辞』の影響が明確に見える箇所を傍線で示した。

「秋興賦」潘岳

四時忽其代序兮、万物紛以迴薄。覧花蒔之時育兮、察盛衰之所託。感冬索而春敷兮、嗟夏茂而秋落。雖末士之栄悴兮、伊人情之美悪。善乎宋玉之言曰、悲哉秋之為気也。風蕭瑟兮草木揺落而変衰。憀慄兮若在遠行。登山臨水送将帰。

（四季はたちまちの間に移り変わり、万物は入り混じって廻っていく。その季節ごとの花が咲き、種をこぼしていくのを見ては、盛衰の理を知るのである。冬には全てのものが尽きるも春には蘇るのに感動し、夏には盛んに茂るも秋には枯れ落ちてしまうのを嘆く。つまらない私にも人生の栄枯があり、やはり嬉しいもの悲しいものである。かつて宋玉はうまいことを言ったものだ。「悲しいことよ、秋の気というものは。風がさわさわと吹いて草木が揺らぎ落ち変容してしまう。それは山を登り水を眺めて旅をして国に帰る人を送るかのようにぞっとする」）

「詠懐」　阮籍

湛湛長江水、上有楓樹林。　湛湛たる長江の水、上に楓樹の林有り。
皐蘭被径路、青驪逝駸駸。　皐蘭径路を被い、青驪駸駸と逝く。
遠望令人悲、春気感我心。　遠望人を悲しましめ、春気我が心を感ぜしむ。
三楚多秀士、朝雲進荒淫。　三楚には秀士多し、朝雲もて荒淫進む。
朱華振芬芳、高蔡相追尋。　朱華芬芳を振るい、高蔡相追尋す。

一為黄雀哀、涕下誰能禁。　一たび黄雀の為に哀しみ、涕下りて誰か能く禁ぜん。

（滔々と長江の水は流れていき、そのほとりには楓の樹の林がある。水辺の蘭は小道を覆い、黒毛の馬が足速く駆けてゆく。遠きから眺めているとその景色は人を悲しませ、春の気配は私の心を揺り動かす。三楚には優れた人物が多かったが、朝雲と言う美女によって荒廃が進んでしまった。そのうち赤い花がよき香りを撒き散らし、美女によって国の滅びた楚の高蔡の後を追うことになるであろう。黄雀が楽しく遊んでいると弓で射られてしまうように、快楽を求めて国政を忘れた王は他国から侵略されてしまうものだということに悲しんでいると、涙が零れて誰であろうと留めることができない。）

「春思賦」でも「屈平有言、目極千里傷春心。」と、やはり『楚辞』を引用するのは、『楚辞』とこれらの先行の作品を念頭に置いているためだと考えられる。「春思賦」は「秋興賦」からの影響が見られ、季節に寄せて心情を述べることや、『楚辞』を踏まえていることに加えて、序の構成、用いられる語からも影響を見て取れる。潘岳は現在の境遇が本来の自分の性質と異なることに苦しみ、王勃は「旅寓巴蜀、浮遊歳序。殷憂明時、坎壈聖代。」と自分の資質が世に受け入れられないことに苦しむ。官位を重荷に思う者と官位を欲するものと境遇は反対であるが、ともに自分の資質と現在の境遇との相違に苦しむ点では同じである。また語においても、共に制作年、現在の年齢を冒頭に書き、秋と春の違いはあるが「于時秋也」、「于時春也」と共通する語が見られる。

秋興賦并序

晋十有四年、余春秋三十有二、始見二毛。以太尉掾兼虎賁中郎将、寓直于散騎之省。高閣連雲、陽景罕曜。珥蟬冕而襲紈綺之士、此焉游処。僕野人也。偃息不過茅屋茂林之下、談話不過農夫田父之客。摂官承乏、猥廁朝列。夙

興晏寢、匪遑底寧。譬猶池魚籠鳥、有江湖山薮之思。于是染翰操紙、慨然而賦。于時秋也。故以秋興命篇。

（晋十四年、私は三十二歳となり始めて白髪が見えた。太尉掾として虎賁中郎将を兼ねていた私は、散騎省に宿直していた。高閣は雲が連なるも、部屋には日の光が差し込むのが稀である。高価な冠と美しい絹の衣を纏った人々がそこには行きかっている。私はもともと野の出身である。住むところは茅の屋根と枝茂る林の下に過ぎず、語らう相手は農夫や田父の連中だった。だが、卑しくも仕官することとなり、朝廷に名を連ねることになった。朝早くに起き夜遅く寝るように、休む暇もない有様であった。それはあたかも池に飼われた魚や籠にとらわれた鳥が、自由を求めて江湖の山藪に思いを馳せるようなものであった。ここにおいて、筆に墨を含ませ紙を用意し、深いため息をつきながら賦を作った。時はまさに秋である。そこで秋興賦と名づけたのである。）

しかし、「秋興賦」は本文にかけても、自身の現在の境遇・悩み・今後の人生への展望とつづけて、一人の人生を締めくくる。一方、「春思賦」は、悲哀、閨情、歓喜、惜情などのさまざまな心情や、秦、蜀、長安、王勃の滞在する臨卭などのさまざまな場所や、春秋時代、戦国時代、漢、後漢、王勃にとっての現代である唐などのさまざまな時代や、長安の貴公子、妓女、塞外の警護をする夫とそれを遠くから見守る妻、蜀を旅する王勃自身などのさまざまな人物が描かれており、一人の人物をもとに一つの物語を長く築いていくのではない。「春思賦」は春のさまざまな様相を短くまとめて、それらを積み重ねて一つの作品として作り上げたものである。その様相は、大きく春に対する喜びと春に対する悲しみに分けられる。

まず、春への歓喜を描いた箇所から見ていく。春の光が辺りに満ち溢れ、厳しい冬の寒さから彩り豊かな春へと移り変わっていく山水の変化が描かれている。

若夫年臨九域、韶光四極解。宇宙之厳気、起亭皐之春色。…（中略）…霜前柳葉銜霜翠、雪後梅花犯雪妍。霜前雪裏知春早、看柳看梅覚春好。思万里之佳期、憶三秦之遠道。淡蕩春色、悠揚懐抱。

（季節が巡って世界は春へと向かい、美しい春の光が四方を照らす。寒気は和らぎ、東屋のある沢辺では春へと移り変わっていく。…（中略）…霜の前に生える柳の葉は霜を包み込んで緑を際立て、雪の後に咲く梅は雪を侵して艶やかさを際立てる。霜の前や雪の内に春の到来の速さを知り、柳を観賞し梅を愛で春の素晴らしいことを知るのである。世の中が素晴らしい季節であることを思い、長安への道のりが遠いことに思いを馳せる。のどかな春の光景にゆったりと心に思いを抱く。）

山水詩のように、花の色づき、草木の芽生え、美しく芳しい春の到来を愛でる気持ちで溢れている。対を凝らし、双凝対を用いることで、冬から春に移り変わる光景が繰り返され、春の到来によって次第に色づいていく光景が浮かびあがる。また、山水の天然の美しさとは異なった、大都市長安に訪れた春からも春の美しさを描いている。長安の街に生活する華やかな人々の視点から描くことで、山水の美とは異なる装飾された艶やかな春を表現している。

昭陽殿裏報春帰、未央台上看春暉。水精却掛鴛鴦幔、雲母斜開翡翠幃。競道西園梅色浅、争知北闕柳陰稀。斂態調歌扇、迴身整舞衣。銀蚕吐糸猶未暖、金燕銜泥試学飛。…（中略）…長安路狭遶長安、公子春来不厭看。杏葉装金轡、蒲萄鏤玉鞍。聳蓋臨平楽、廻笳出上蘭。

（女たちの住まう昭陽殿の内に春のやって来たことを報じ、未央台の上に春の暉きを看た。水晶はそのままに鴛鴦の幔に掛かり、雲母は斜めに翡翠の幃を開く。西園の梅の色が薄いことを言うが、どうして北闕の柳の陰が少ないことを知っていようか。姿を整え歌扇を飾り、身体をくるって回して舞衣を整える。銀の蚕は糸を吐いてはいるが

まだ温かくはならないし、金の燕は泥を銜えて飛ぼうとする。…（中略）…長安の道路は立派なお屋敷が立ち並んで狭く、長安を取り囲むように続いている。お金持ちの貴公子は春の到来を飽くことなく見続ける。貴公子は杏葉の金の轡を設えて、蒲萄の玉鞍を飾る。笠を高くそびえさせて平楽へ向かい、笳を廻らして上蘭を出発する。）

長安に住む人々にやってきた春を描いたものである。まず女性の視点から描き、女たちが住まう昭陽殿に到来した春、室内の豪華な装飾品、艶やかな美人の装いを次々と連ね、絢爛な春の様相を表現していく。つづいて男性の視点から描き、長安の華やかな街並みに到来した春、豪華な鞍、轡、鞭を装う貴公子の外出、それぞれが積み重なって描写されることで、春の華やかさを際立てている。女性と男性の立場の両方から、長安に訪れた春の様相を描いている。都市の春は、山水と異なって人工的な美による視点から描かれているが、やはり春を愛でる気持ちが表現されている。

つづいて春の悲しみを描いた箇所を見ていくと、異郷であるために春がまだ訪れず、その上異郷の馴染みの無い生活に苦心する思いが描かれている。

野何樹而無花、水何堤而無草。於是僕本浪人、平生自淪。懐書去洛、抱剣辞秦。惜良会之道邁、厭他郷之苦辛。忽逢辺候改、遥憶帝郷春。

（野のどの樹にも花がなく、水辺のどの堤にも草が生えていない。そもそも、私は浪のように漂う者であり、普段からはかない身の上である。書を抱えて洛陽を去り、剣を帯びて秦を去る。良き宴は道をどんどんと過ぎ去っていくかのようであり、他郷の辛苦にはうんざりとした。突然、辺境の地の気候は一変し、遠い郷里での春はどうなのであろうと思いを馳せる。）

ここでの春は、王勃が現在蜀で体験している春である。前章で見てきた異郷の地で迎える春と同様に、異郷に馴染めない思いと、たちまちにして時間が過ぎてしまったことを表わしている。はじめは冬の厳しい時期で、花もなければ氷で草も生えなかった。しかし、異郷で何をするでもなく虚しく時間ばかりが過ぎて、たちまちにして季節は移り変わっていく。そうしてかつての長安の春に思いはせて、現在の境遇を悲しむさまが描かれている。だが、「春思賦」は王勃自身の体験ばかりでなく、塞外を警護する夫とそれを遠くから見守る妻の視点からも春の悲しみを描いていく。

語道河源路遠遠、誰教夫壻苦行行。君行塞外多霜露、為想春園起烟霧。遊糸生罥合歓枝、落花自遶相思樹。春望年年絶、幽閨離緒切。春色朝朝異、辺庭羽書至。…（中略）…昨夜祁連駅使還、征夫猶在鴈門関。君度山川成白首、応知歳序歇紅顔。紅顔一別同胡越、夫壻連延限城闕。羌笛唯横隴路風、戎衣直照関山月。春色徒盈望、春悲殊未歇。

（聞く所によれば河源の道はとても遠い言い、誰がどうして夫が苦しんで旅していることを教えてくれるだろうか。あなたは城塞の外へと警護へいくも、そこは霜と露の多い場所である。だからあなたのために春の庭園に靄が立ち込めないであろうかと思う。遊糸は網のように合歓の木の枝に生じ、落ちる花は自然と相思の樹を廻っている。春の眺めは年々異なり、あなたを思い慕う繋がりは切れ切れとなる。春の景色は毎日異なり、辺境の地に手紙が届けさせる。…（中略）…昨夜都からの駅使は帰っていくが、旅の夫はまだ城塞の地につながれる。あなたは山や川を越えることで白髪が増えていき、まさに時の流れに従って、若さが失われていくことに気付くのである。瑞々しい顔立ちは失われて胡越の者たちと同じような顔になる。夫は辺境の城塞につながれて警護をする。異郷の羌笛の音は隴路の風より伝わって、異郷の戎服はただ関山の月を照らすばかりである。春の景色は虚しく眼前に広がるも、春の悲しみはどうしようもなく未だに止まない。）

遠く離れた夫を思いやる、閨情詩を思わせる春の悲しみである。辺境の城塞を警護する男の状況など誰も女に知らせてはくれなくとも、女は男を想って辺境の地であっても美しい光景が広がって欲しいと願う。だが、時の経過が人に与える影響は大きく、春の眺めは年々失われてしまうように、男との契りの糸は途絶えてしまいそうになる。春の様相は日々刻々と変わってしまうが、それでもただひたすらに辺境の男へと手紙を送りつづけることで相手を思い続けようとするのである。一方、男は辺境の要職に就くが長い赴任期間に老いてしまい、春の景色は眼前に広がろうともそれを愛でることもできず、過ぎ去ってしまった時間を偲んで春の悲しみは尽きることが無い。ここでの春は、移り変わってしまうことへの恐れや嘆きを春の悲しみに寄せて詠ったものである。過ぎ去って時間へ思いを馳せる点が行旅の詩と共通し、王勃の春の悲哀には虚しく過ぎ去ってしまった時間を悲しむ傾向が見られる。王勃の現在の状況を述べた箇所からもそれを窺うことが出来る。

比来作客住臨邛、春風春日自相逢。石鏡巖前花屢密、玉輪江上葉頻濃。高平灞岸三千里、少道梁山一万重。自有春花煎別思、　無労春鏡照愁容。盛年眇眇辞郷国、長路遥遥不可極。形随朗月驟東西、思逐浮雲幾南北。春蜨参差命儔侶、春鶯綿蛮思羽翼。余復何為此、方春長歎息。

（最近、食客としてかつて司馬相如が住んだ臨邛に住まい、春風と春日とに出会った。石の鏡のごとき巖の前に咲く花はとても密であり、玉の輪のごとき川上では葉がぴったりとくっ付き色濃くなった。高平なる灞岸は三千里もの長きに渡り、少道なる梁山は一万にも重なる。もとより春の花は別れの思いを辛くするものであるも、春の鏡でわざわざ愁いの様相を照らすことはないのである。若い時は些細なことで郷里を去って、長い旅は延々と続き終わりがない。身は円なる月に従ってあちこちへと馳せ、心は浮雲のようにふわふわと漂いながらあちこちをつぶさに見る。春の蝶は入り乱れて仲間に場所を告げ、春の鶯は細く長く声を引いて鳴いて左右を助けてくれる者のことを

思う。私はまたここで何かをなしたいと思うが、何もなせないままに春になってしまい、時の流れの速さを痛感しながら長くため息をついた。）

蜀の都市である臨邛に住むことで、王勃は春の風や光など美しい山水と出会うことができた。だが、これまで見てきたようにやはり美しい春の景色の中に居ても素直にそれを愛でることもできず、別れの傷みや憂いの思いが沸きあがってしまうのである。王勃の長い旅は今現在も続いており、あちらこちらをただ何とはなしに進むだけで一人孤独なままである。そうした何をなすこともできないままただ時間だけが過ぎていき、春がまた再び巡ってきたことでその悲しみを痛感しているのである。

「春思賦」はこれまで見てきたように、大きく喜びと悲しみの視点から春を描く。だが、それは対立する表現ではなく、ただその時々に感じたありのままの感情をそのままに描いたものである。登場する人物も時代も場所も異なるが、一つの作品に纏め上げたものである以上王勃の心を描き出したものと言える。また、「春思賦」の中には「亦有当春逢遠客、亦有当春別故人。風物雖同候、悲歓各異倫」と見え、春の出会いもあれば別れもあり、目に映るものは同じでも見る人によって喜びにも感じれば悲しみにも感じるとする。王勃は、同じ景色であっても受け取る感情はそれぞれであることを認識していたことがわかる。そのため、春に強く心を動かされる王勃にとって、春の景色をさまざまな視点から描くことは、その時々で最も深く感じた感情をありのままに描こうとしたものと言える。そのありのままに感情を描くことが「庶幾乎以極春之所至、析心之去就云爾」と、自身の心を見極めることにつながるのである。

四　まとめ

「春思賦」から、王勃は春を感じたまま、ありのままに描き、さまざまな春の表現を集大成した詩人であると言える。王勃は、「春思賦」制作期の蜀中の不遇から、将来に不安を抱いており、自分の心見極めるために、最も感慨を受けやすい春を題材として作品を作り上げた。その春の表現は、大きく歓喜、悲哀から描いており、さらにそれぞれの歓喜、悲哀の中でまたさまざまな視点から春を描いている。春への喜びの表現は、冬から次第に色づき始めた山河に訪れた春や、人も建築も艶やかな長安に訪れた春に見え、それぞれの春を愛でる気持ちが描かれている。一方春への悲しみの表現は、異郷の生活の苦しみ、時間だけが過ぎたことへの傷み、老いてしまったことへの嘆きなどが見え、それぞれの春を悲しむ気持ちが描かれている。その中でも特に、春の到来によって痛感する時間の経過は、旅遊中の王勃の心情をよく表わしたものである。自己の才を自負しながらも、蜀中では「殷憂明時、坎壈聖代。」（「春思賦」序）や「才高而位下。」（「澗底寒松賦」）と、何も成し遂げられないまま、ただ時間だけが経過していき「余復何為此、方春長歎息。」（「春思賦」）と嘆くだけであった。この何も成し遂げられないことへ憤りは春の行旅の詩にも表われており、王勃の春の表現の特徴の一つである。

また、「春思賦」では賦という敷き連ねるのに適した文体によって、春のさまざまな様相が一つの作品内に詰め込まれていった。そして詩においては、「春思賦」に見られたありのままの春への感情一つ一つを、山水詩、宴詩、行旅詩などに細かく分けて、春によって感じるそのままの思いを、それぞれを集約し短く滑らかに詠いあげたのである。

［注］

（1）唐代以降「悲哉行」は必ずしも春と旅は結びつくものではない。孟雲卿は春の描写が見えないし、白居易に至っては旅の描写すらなくなっていく。

（2）年光は、梁元帝「別荊州吏民」詩の「年光徧原隰、春色満汀洲。」や、何遜「渡連圻」詩の「客子行行倦。年光処処華」など、梁から見える語である。その後初唐によく例が見られ、王績には「年光恰恰来、満甕営春酒」（「春日」）、「年光随処満、何事独無花」（「春桂問答」）、「春来日漸長、酔客喜年光」（「初春」）と三例、王勃も「自然催一酔、非但閲年光。」（「対酒」）、「行今朝花樹下、不覚恋年光。」（「春遊」）、「上巳年光促、中川興緒遥。」（「上巳浮江宴韻得遥字」）と三例、楊炯「年光揺樹色、春気繞蘭心」（「和騫右丞省中暮望」）、駱賓王「千里年光静、四望春雲生」（「賦得春雲処処生」）に各一例見られ、いずれも春を舞台と作品で見られるようになる。しかし、一年の周期の意に重きが置かれ、春の光景としてではなく歳月に解した例も見られる。白居易「早秋曲江感懐」の「人寿不如山、年光忽於水」では、年光は過ぎ去る時間の意で用いられている。

（3）王勃が絶句に巧みであり、短く滑らかに心情を詠うことに関しては、今原和正氏「王勃の詩について」（『芸文研究』四三号（一九八二年）・慶応義塾大学芸文学会）において詳細に論じられている。

（4）蜀滞在を二年程度と考えるのは、王勃の「入蜀紀行詩序」に、総章二年五月（六六九年）に、長安から蜀へ訪れたとあり、楊炯の「王子安集序」に虢州補参軍への赴任が咸亨年間（六七〇―六七三）の初めとあることによる。「春思賦」は、序文に咸亨二年（六七一年）とあることから、蜀で迎える二度目の春である。

（5）『世説新語』言語篇に「過江諸人、毎至美日、輒相邀新亭、藉卉飲宴。周侯坐而歎曰、『風景不殊、正自有山河之異。』皆相視流涙。唯王丞相愀然変色曰、『当共勠力王室、克復神州、何至作楚囚相対。』」と見える。

（6）このような現地での理解者がいない思いは、異郷での思いを述べた「他郷叙景」にも見られる。

他郷叙景

綴葉帰煙晩、乗花落照春。　葉を綴る帰煙の晩、花に乗ず　落照の春。

辺城琴酒処、倶是越郷人。　辺城　琴酒の処、倶に是れ　越郷の人。

（夕方にもやが収まり、葉の茂った木々が徐々にあらわになっていき、美しい春の夕陽に照らされて、花はよりきれいに見える。都から離れたここ辺境で、美しい琴の音に耳を傾け、うまい酒を味わうとき、一緒にこれを楽しむのは、私と同様に故郷を離れた人である。）

（7）「益州夫子廟碑文」の序には、柳太易の依頼で作られたことが記される。益州の夫子廟は、各州県に廟堂や学館を造営するよう示した高宗の咸亨元年の詔（五月丙戌、詔曰、「諸州県孔子廟堂及学館有破壊并先来未造者、遂使生徒無肄業之所、先師闕奠祭之儀、久致飄露、深非敬本。宜令所司速事営造。」・『旧唐書』高宗本紀）によって建築された国家事業の一つであった。蜀旅遊中の王勃がその碑文制作に関わるには柳太易の特別の配慮があったと考えられる。また、盧照鄰にも柳太易に寄せて作った「于時春也慨然有江湖之思寄贈柳九隴」詩が見えるから、柳太易は蜀地の文人たちと深く関わる人物であったと考えられる。

（8）中国文学における春秋偏重の傾向は、松浦友久氏の「中国古典詩における『春秋』と『夏冬』」、「中国古典詩における『春』と『秋』」（共に『中国詩歌原論』大修館書店）において詳細に論じられている。

（筑波大学大学院人文社会科学研究科　博士課程）